

## 協力してくださった先生方の主張

### ●シンポジウム「古典は本当に必要なのか」における主張

#### 否定派

- 猿倉信彦先生(某指定国立大学教授) . . . p.2~3
- 前田賢一先生(メーカーOB・コンサルタント) . . . p.3~4

#### 肯定派

- 渡部泰明先生(東京大学教授) . . . p.4~5
- 福田安典先生(日本女子大学教授) . . . p.5~6

#### 司会

- 勝又基先生(明星大学教授) . . . p.6~8
- 飯倉洋一先生(大阪大学教授) . . . p.8

### ●「高校に古典は本当に必要なのか」において新たに加わる主張

#### 肯定派

- 近藤泰弘先生(青山学院大学教授) . . . p.9~10
- ツベタナ・クリステワ先生(国際基督教大学名誉教授) . . . p.10~12

## ○猿倉信彦先生(某指定国立大学教授)

猿倉氏は議論の前提として、教育が高校、大学でどうあるべきかを「出資者」に還元されるべきものとした。ここで言う「出資者」というのは国と家族である。そして国への還元はGDPや競争力、個人への還元は収入と自己実現とした。教育は税金によってなされているから、基本的に国の生産性や競争力、個人の収入によって「幸福度」は図られるべきであるという。

そして、高校で古典を必修にするべきではない理由として、次の三つを挙げた。

- ①高校生にはもっと他に学ぶべきことがある
- ②日本の社会発展の弊害になっている要素がある
- ③国際競争に必要な世界標準の知識への接続が少ない

### ■①高校生にはもっと他に学ぶべきことがある

人口減少や少子化に伴い大学の経営は深刻化し、日本の学術的・産業的競争力は低下している。文科省の鈴木寛氏の文章で述べられるように「国立大学は理系重視、私立大学は文系にシフト、日本の大学は競争力がない。」というのが現状である。今の日本には、GAFAのような新しい産業を立ち上げられる人材が必要だ。そのためには教育の能率化が重要である。よって高校生はより優先度の高いものを学ぶべきであり、古典は不要だ。

肯定派の渡部氏は議論などの実用的な能力は古びてしまうというが、議論する際のユニバーサルなスキルは古くならない。日本の学生が議論下手だと言われるのは、議論やプレゼンをする文化が欠けている環境で育ったことが根本にある。このスキルを養う授業こそ今の国語教育の中での優先度を最も高くするべきであり、そうすると古典の優先度は相対的に下がる。

### ■②日本の社会発展の弊害になっている要素がある

古典教育は年功序列や男女差別の固定化を刷り込むツールになっている。日本の古典は、SDGsに示されるジェンダー平等・個人や国家間での不平等の是正と逆行するものである。また、日本では未だに年下、女性、または外国人などの上司ができたなら凹む日本人男性が多く、それこそが日本の古典教育（或いは儒学的マインド）の影響なのではないか。ポリコレ的センスで古典のコンテンツの考えは偏っているため、古典は有害である。肯定派は古典を教えると優しさが発生する（渡部氏の「情理」を指していると思われる）と言うが、それは生徒の受け取り方次第であり、教科書は権威化されてしまう。

### ■大学の倒産防止のための国文学

古典を学びたい人もいる。また、国文学は設備なしで学生を集めることが可能で世界との比較も不要であるので、教育サービス提供側の視点ではコスパのいい学問である。

### ■コンテンツビジネスとしての古典

古典は芸術であるため、存在させなくてはならないが強制すべきではない。古典教育の必要性について、言葉とナショナリズム・愛国心の観点から説明されることがあるが、それらは言葉の文化ではなくとも芸術教育によって作ることができる。

西欧諸国は自国の文化のディスプレイが巧みである。一方、日本は長い歴史の中で培われた文化があるにも関わらず、ディスプレイが苦手である。古典教育についても同様であり、今の古典教育はフォロワーよりも反発者を多く作ってしまっている。

本当に古典を愛する人だけで学べば、古典はコンテンツビジネスとして日本の魅力を伝えるものになるのではないか。

### ■ユーザー目線の人文学を

現在では、高校以前または大学の教養相当の人文学全般が「微妙になっている」。結局人文学をする人のための人文学になっていて、その他の人たちにとって活用可能なものになっていない。しかし、哲学や宗教といった人文学を学んでいなければ、カルトなどにはまってしまう人も出てくる。また、理系の人にとって人文学の知識は海外とのインターフェースとして重要である。そのため、例えば理系の学部生が用いるための社会学や国際関係論なども含めた人文学教育、といったユーザー目線に立った人文学が必要とされる。

古典には良い観点もあるが、それは哲学へと移行して、西洋哲学などとあわせて現代語訳で学んだ方がいい。

海外とのつながりという点を考えると、これから外国人を受け入れていく日本においては、ビジネスなどの場面での日本語を簡単にする必要がある。

### ■教育の最適化のアルゴリズムを開発せよ

現状、日本の教育は縦割りになっている。しかし、高校3年間という限られた時間の中で、何を教えるのが最適か。これについて議論するためには、教科ごとの垣根を超え、何を教えれば高校生は幸せになれるのかを判断するアルゴリズムを作る必要がある。そのアルゴリズムを使って教育を最適化すべきである。

そして「納税者は古典を読みたいとは望んでいない」ため、肯定派福田氏の考え(後述)は否定派および世間の考えからずれている。

このように人それぞれの価値観が違う中、どのように合意を形成し教育を設計するかは古典教育において特に難しい点である。

なお、③については具体的な説明はなかったが、日本の若者の競争力を強化するための教育が必要であるという①の説明や、国際標準の知識である西洋哲学の話などから、③の主張は常に念頭に置いていたと思われる。

## ○前田賢一先生(メーカーOB・コンサルタント)

前田氏は、古典を「過去に表現された立派な内容」、古文を「古典が書かれた言語」と定義した。そして、古典は内容で評価すべきでありそれは現代語訳で理解が可能であること、また、高校以降の古文・漢文は選択制にすべきであることを主張した。

### ■古典を現代語訳で学ぶべき理由

本当に原文で古典を読まなければならない人は少数である。また、現代語を正しく使うことが目的ならば、古典文法を教えるより「正しい現代語」を教えた方が効率が良い。

古典を原文で学ぶということは、ニュートンの著書『プリンキピア』をラテン語で学ぶのと同じことであるが、どちらも現代語訳で読めば十分である。

次に、古文でないと伝わらない部分があると古典ファンは言うが、物事を理解するために個人が作り出す対象のモデルは人によって多くの差異があり、いちいち追求してはキリがない。また、古文を勉強したからといって、古文だけにある微妙なニュアンスがわかるわけではない上に、それを理解する必要のある人は誰なのかを問うべきである。

プレゼンの中で用いた「～すべし」といった表現の原型は古文にある、という話がある。しかしそれは国語辞典に載っているため現代語であり、古文を学ぶべき理由にはならない。

また、古語と現代語のように異なる言語間での翻訳ではニュアンスが変わってしまうという話については、翻訳すると変わるのはあくまで立ち位置であり、本来その文が持つ意味は同じである。ただし、誤解が起こらないよう、意味をしっかりと説明して翻訳すべきである。

#### ■古文・漢文は芸術科目として選択制であるべき

古文・漢文の多くは文学作品なので、芸術科目として選択制であるべきだ。世の中には役に立たないが、役に立たなくても必要なものは沢山ある。その中でも特に古文・漢文を必修科目として取り立てる必要はあるのか。

また、「自由度」こそ大切である。大学に入ると必修は少ないが高校では必修が多すぎるため、もう少し高校での科目選択に「自由度」を持たせて、当人がもっと深く勉強したいことを学ばせるべきだ。

#### ■教養は強制すべきではない

古文・漢文を教養としては認めるが、教養だからこそ強制すべきではない。猿倉氏と同じように、高校生の限られた時間の中で、古文・漢文を必修として時間を割いて習うことには疑問が残る。さらに、国語にはリテラシーの面と芸術の面があるにも関わらず、学習内容は古文や漢文といった芸術の分野に偏っている。誤解のない文章の書き方といったリテラシー分野の学習をより積極的に行うべきである。

#### ■教科間の関係

例えば、社会学者は『21世紀の資本』に述べられた社会法則を社会学だけの法則だと思っているが、それは実は物理法則である。このように社会学には社会学の法則があると思ってしまうのは、誤りである。

## ○渡部泰明先生(東京大学教授)

渡部氏は、新学習指導要領に定められる「言語文化」に基づき、古典を「第二次世界大戦くらいまでの小説も含めた文学作品」とした。

#### ■古典の意義は主体的に幸せに生きるための智慧を授けること

古典の意義は、主体的に幸せに生きるための智慧を授けることである。ここで言う「主体的に幸せに生きる」とは生活に潤いをもたらすことだけではなく、良い仕事を責任ある立場で成すことだ。つまり、古典は個人を満足させるだけではなく、個人が社会に働きかける力を与えるのである。良い仕事を責任ある立場で為すためには、指導力と優れた着想が必要となる。徒然草から読み取れるように、古典は情理を尽くして人を教え導く指導力を与え、さらに自由で優れた着想や発想をもたらす。

#### ■古典は共生を感じさせるもの

古典の「典」が表すように、古典とは古い文書すべてではなく、特に素晴らしい内容のものを言う。その素晴らしい内容というのは、「共生」を感じさせるものである。

#### ■実用的な能力よりも、能力を内面化すること

また、現実は一瞬一瞬と変化していくので、高校では実用性を重視しすぎた教育は避け、より広い教養を学ぶべきである。議論する能力やプレゼンテーション能力は確かに重要だが、そうした実用的なものの目的は非常に限定されているため、変化していく現実に対応できず古びていってしまう。

さらに、議論やプレゼンテーションの能力は、教えてもすぐに役立つものではない。役立つためにはそれらの能力を内面化する必要がある。古典を通じて、「心を預ける／切り離す」という内面化の作業を学ぶことができる。これこそ、議論やプレゼンテーションの能力以上に重要なのだ。

#### ■授業について

教室というのは、生徒に生徒として演じることを強要する場である。その教室で何か問題を考える際、生徒を萎縮させないために必要なのは、議論やディベートの技能よりも「参加感」である。

そこで氏は、生徒が和歌を詠むことで「心をいったん自分から切り離す」という技術を学べる参加型授業を提案した。

#### ■現代語訳・文法

現代語訳は授業で大いに使うべきだが、言葉に即して物事は考えられているので、原文を知る必要もある。また、和歌のように言葉の調べに触れる機会は持ってほしい。

文法については、言葉にきれいな規則があることを知る喜びは教えてほしいが、「文法のための文法」は止めるべきである。

#### ■他分野との協働

例えば「死生学」という学問では、医学者と文学者が共に研究している。このように、分野を超えて協働的に考えるべきことは多い。

以上のほか、理系の人には自国の文化を語って国際的に活躍できる人になってほしいことや、古典は信仰であるため日本人の心の救いに関わっていることを述べ、古典は必要だと主張した。

## ○福田安典先生(日本女子大学教授)

福田氏は「それなりに豊かな国の納税者」には自国の文化を識る権利があると規定した。

#### ■高校教育に古文・漢文は必要

江戸時代には医学書のパロディの文学書が存在していた。そこからわかる事実は、近代以前には文系・理系という対立概念がそもそもなかったということである。また、くずし字や漢文で書かれた近世の医学書や農学書を読むといった知の世界に分け入ることができるのは、現在では文学部だけであり、文学部でそれらを読むためには高い技能とトレーニングが必要である。

さらに、自国の文化である古典を読み解く能力を得ることは国民の権利に含まれる。

以上の2つより、高校教育に古文や漢文は必要である。

古典や古文の授業が減らされている今、新学習指導要領への提言という形で生産的な議論を重ねていくことが重要だ。

### ■文系・理系への疑問

高校で文系/理系を分けることは子どもの幸せのためではなく、単に入試のための枠組みになっているだけではないか。猿倉氏は理系用の人文学が必要だと述べたが、文系理系で国語教育を分けた上で、理系用の古文を設置するのはどうだろうか。

### ■国際関係を繋いだ日本の古典

古典がフィリピンと日本の国交回復に一役買ったことから、「伝統芸能を守る」という日本の姿勢は諸外国に影響を与え、海外からの評価も高いと言える。

氏は文学部の教員として古典を教えるにあたり、古典が「好き」という人を少しでも増やすことを目指すべきか、抜本的に日本の古典教育を変えていくべきかという問いを今まで教員志望の学生に問うてきたという。今回のシンポジウムを通して自身もこの問いに向き合うことができた、この機会に感謝の意を表した。

## ○勝又基先生(明星大学教授)

近年、古典の危機について論じる会合は少なからず開催されてきたが、それらは反対派と対峙しないまま必要論だけを振りかざすものだった。このままでは、不要派の前で主観的な肯定論は無効化され、面白さだけで盛り上がっている肯定派は教育や研究の場から追い出されてしまう。そこで、勝又氏はこのシンポジウムを、肯定派が反論のための反論をするような場として設定した。そして、本著においてパネリストの主張を以下に挙げるように指摘し、肯定派に対して「でもそのことは、古典(古文)じゃなくても教えられ(学べ)るんじゃないですか?」「でもそれは、原文じゃなきゃいけないんですか?」「だからといって、必修じゃないといけないんですか?」という3つの問いに答えられなくてはならないと警告した。

### ■人文学軽視の背景

否定派は大学の世界ランキングなどの客観指標にこだわるが、そのように目的に対して性急でありすぎるとかえって非効率的になる。

だが、確かに客観指標も意識しなくてはならない。日本の人文学部のランキングが世界的に低い理由は、その成果が英語で書かれていないことや「日本について学ぶのは日本の大学が一番」だと思われているからだ。世界では言語の壁を超えての研究が盛んである。日本はその点で置き去りにされており、変わらなくてはならないにも関わらず、日本文学系の大学院はフットワークが非常に重いのが現状である。

### ■教育が与えられる「幸せ」は何か/日本を経済奴隷の工場にしたいのか

猿倉氏が定義する幸せは、ステレオタイプな理系の意見だ。

第一に、ある学問を学べば生涯年収が上がるかどうかは、どの学問においても人によって異なる。

第二に、科学技術や経済界にこそ人文知が必要とされている。猿倉氏が現在の日本に必要であるとしたGAF Aのようなアイデアは、文理融合によるものである。アイデアの多くは他者を受け入れるところから生まれるものであり、古典の知こそ最も受け入れが容易な他者である。

第三に、数学やプレゼンの知識だけでは社会で通用しない。

第四に、GDPなどを幸せとする前提は経済目線や科学目線である。しかしそれだけでは、目先の利益だけを考えて批判的な視点を持たなくなってしまう。自分の頭で判断することができるような良き市民となるための教育には、人文学が役に立つ。

■「役立つから必要」なのか、「役に立たないけれど必要」なのか/プレゼンに役に立たない古文・漢文

論理という学習目標のためには文学教材では不十分と考えている人がいる。そのため、肯定派はそれに対し、論理のための授業など不要と斥けるか、文学教材でも論理を十分に教えようと訴えるべきである。古典に携わる人は、「限られた高校必修の時間の中で、なぜ古典を学ぶことが必要なのか」という社会からの問いや、「なぜこんなものをやらなければならないのか」という生徒からの問いに明確に答えなければならない。その際、「役立つから必要だ」または「役に立たないけれど必要だ」というどちらの説明をするか、さらに「どう役立つのか」「どう必要なのか」というところまで説明が求められる。

これからの国語教育において文学が果たしうる役割を真剣に考える必要がある。

■高等学校での学びを低く見積もりすぎなのでは？

前田氏が示した「自由度」については賛同できない。必修を減らし、最初から好きなものだけを自由に学ばせれば、高校生の視野は狭まる。それでは早々に文理の分断が生まれてしまうかもしれない。義務教育を終えた高校生は、浅くも広い知識を持っている。だからこそ、国が必修科目としてバランスのとれた学びを提供し、その視野をさらに広げることが必要なのである。

■何度も習う同じ古典作品

現在の古典の教科書では同じ作品が何度も取り上げられ、それらの作品は特に平安文学に偏っている。その理由としては、学校文法が当てはまるため試験で問いやすいことや、学習指導要領の方針に合致することなどが考えられる。古典の存在意義が問われている今、慣習にとらわれない古典の作品選びがなされなければならない。

■古典は「我が国の一員としての意識を高める？」/古文は現代文化の発展にも役立つ/このまま、というわけには行かない

先人が築き上げてきた伝統を尊重というのは古典を学ぶ理由として聞こえが良いが、ナショナリズム的な思考停止をしてはならない。古典は古い価値観を刷り込むツールではなく、現代的な課題を解決する手がかりになるはずだ。

また、古文は現代文化の発展にも役立つものである。

ただし、今求められている教育は、現代を生きる若者にとって必要だと感じられる教育である。そのために、古典教育は文法と文学史を離れるべきである。

■ポリティカル・コレクトネスと古典

社会における偏見が古典教育のせいだというのは、乱暴な結論に思える。もし猿倉氏が源氏物語に見られるような現代にそぐわない価値観を想定し、古典は有害であるとしているならば、文学表現の理解として初歩的な誤りである。

■豊かな語彙は必要ないのか/古い言葉は現代語の豊かさを育むのか/今こそ現代語訳だけでは不十分

語彙は政策的に減らすのではなく、自然に任せるのが良い。

また、現代語訳だけで済ませることには賛成ではない。日本ではわずか70年前まで文語が使われていた。文語が読めなくなれば、昔の日本と繋がるチャンネルを自ら断ち切ることになってしまう。不確かな情報が飛び交う現代においては、文語文に自らアクセスできることが大事なりテラシーである。

## ○飯倉洋一先生(大阪大学教授)

議論を終えて。ディベートとしては否定派の「勝ち」ではあったが、アンケート結果などからみても古典が人生に必要という感覚は揺るがなかった人が多かった。ただ、その中で、古典教育の効果の可視化・数値化という問題が浮き彫りになったと主張。否定派に優位な数値になりうることを意識してこの問題の解決策を探すべきだとした。

### ■古典の縮小は決まっている

現在、古典は高1では必修だが、2・3年次では選択であり、センター試験のために選択せざるを得ない生徒が多いという状況である。

つまり、古典教育はすでに、否定派の求める「古典は選択制の芸術科目であるべき」「ごく一部を必修とするか現代語で教えた方がよい」という流れになっているのである。古典を芸術科目に組み込むのは、古典教育の縮小の次のステップだろう。

### ■古典の持つ論理的な面

否定派の「古典は論理的ではなく情緒的な表現芸術であるため、芸術のコンテンツとして現代語訳で与えればよい」という解釈は一面的である。古典には現代的思考に資する論理のテキストがあり、現代的思考を相対化する論理のテキストもある。現代語訳では現代的思考の枠組みに収まりかねないので、やはり古語での解釈が必要である。

### ■古典を批判的に読む

否定派は、古典に含まれる身分社会の肯定や男尊女卑的な思想などは有害であるため排除すべきだとしたが、それらを意識して読むことはむしろバランスのよい思想形成を促すため意義がある。古典をただ素晴らしいと読むのではなく、批判的に読む視点を育てることが重要である。

### ■古典は国語力向上に役立つ

「国語力」の大切さは否定派でも肯定派でも共有されていた。古典が国語力の向上に役立つ、かつ優先順位も高いということをエビデンスとともに主張できれば、否定派も納得するだろう。また、古典がディベート力やプレゼン力、英語理解能力の向上にも有用だと示せば理想だ。そのためにはまず、古典教育における教材や文法の扱いを再考すべきである。さらに、古典は芸術科目でなく国語科だと証明せねばならない。

ただし、国際交流のコンテンツとして古典を芸術と捉え、継承しディスプレイする観点も同時に必要である。

## ○近藤泰弘先生(青山学院大学教授)



### ■古典を必修から外せという主張は少数派

高校教育において古典を縮小する動きがあるのは確かだが、必修から外すという話は目にしたことも聞いたこともない。あるとしても非常に少数派の考えだと言える。よって古典を必修にすべきか否かという話には意味がない。

### ■公教育の目的

公教育の目的は産業の発展ではなく、人間が人間らしく生きていくための基礎的な知識や学力をつけることにある。

### ■自然科学と人文科学

自然科学は、(宇宙が始まってから今まで存在していて、同じ法則で動いていることを前提とした上で)全世界共通かつ宇宙が始まってから終わるまで変わらない、普遍的な法則を相手にしている。

対して人文科学や社会科学は、地球上の様々な空間(民族や国)における差異や特異性、また歴史上の変化の実際について研究する学問である。

このことから、人文科学や社会科学にあって自然科学にない知識構造は空間の多様性や歴史的变化の構造であると言える。

生きていく上で世界の広がりや歴史の流れについての洞察をすることはとても重要であり、「古典」語の教育は日本語及びそれによる文学の歴史を学ぶために欠かせない。

このような人間としての根幹を作る基礎的な教育は、人類普遍的なものの見方を育てることにつながる。

### ■日本における古典学習の必要性

英語とラテン語は別系統の言語であるが、日本語と古典語は同じ系統の言語である。よって、英語圏でラテン語を必修にしないことは、日本で古典を必修にしないことの原因にはならない。

また、中国語と古典中国語の関係は日本語と古典語の関係と似ているが、中国では中学・高校において、古典中国語の学習が日本以上に重要視されている。これは、古典語から現代語まで通じる文化の流れを学ぶことができるからである。日本でも同様に、日本文化の理解には古典語への理解が欠かせない。日本に移住してきた外国人への教育などを考えても、古典の学習は必要である。

### ■今の古典文学の教育は変えるべき

今の古典文学の教育には、改善できるところがある。教科書を工夫して、現代語と対照し、重要単語を文法説明を加えるなど、わかりやすく示す方法があるはずだ。同時に、入試で問うべき内容についても再考の余地はあるだろう。漢文の取り扱い方についても、日本漢文をより多く入れるなど工夫の余地はある。

### ■より良い研究をするためには

テキストを分析するのに、コンピュータほど適したものはない。文学部でも、コンピュータを積極的に用いた応用研究が進められるのが望ましい。

### ■古典の持つ可能性

人間の感情や心情をさぐることは、今後、経済活動の非常に重要なテーマになるはずだ。古典語研究は、テキストを分析して過去の人間の心情の在り方を研究するものなので、21世紀型の新しい経済を切り開いていく可能性がある。そうした中で、長い歴史を持つ日本は、世界に発信できるものがたくさんある有利な立場にある。日本からそのように発信していくための基礎として、高校生が古典を学ぶことは非常に重要である。

## ○ツベタナ・クリステワ先生(国際基督教大学名誉教授)

ツベタナ氏は、古典文学の知識は、日本文化にルーツを持つ現代の国際社会に生きていて、人類の発展に貢献できるために必要であると主張する。

### ■古典を知ることは、日本の重要な知的遺産を知ること

「今日私たちの用いる知的能力の量は過去よりも少ないとも多いとも言えます。それに、昔とまったく同種の機能を用いているわけでもありません。たとえば、感覚的知覚の利用は明らかに少なくなっています。(中略)植物や動物についての私たちの知識についてもまったく同じです。無文字民族は自分たちの環境と資源のすべてについて、途方もなく正確な知識を持っています。こうしたものすべてを私たちは失ってしまったのですが、その代償として何も得なかったわけではありません。たとえば、どの瞬間にも押し潰される危険性があるのに、そういうこともなく自動車を運転できるし、夕方にはテレビやラジオをつけることもできます。それには知的能力の訓練が必要ですが、「未開」民族は必要がないためそういう能力をもちません。潜在能力としては精神の性質を変えることもできたはずですが、この人たちの生活様式と自然との関係から見ると、その必要がないのでしょう。**人間のもつ多様な知的能力をすべて同時に開発することはできません。ごく小さな一部分を使用しうるのみで、どの部分を用いるかは文化によって異なります。それだけのことです**」(『神話と意味』C. レヴィ=ストロース、大橋保夫訳、みすず書房、1999(1996)、“未開”思想と“文明”心性、pp.24-26)。

前回の「否定派」は、社会における文学の役割をあくまで現代の理解に絞っている。確かに文学は芸術だ。しかし、レヴィ=ストロースが述べているように、社会における文学の役割は文化や時代によって異なる。古代日本においては、歴史的背景から話し言葉(いわゆる「やまと言葉」)の特徴まで、文学、とりわけ和歌がもっとも活発的な知的活動であった。言い換えれば、和歌が主要なメディアであり、知の形態として働いていた。よって、古典を知ることは、日本の重要な知的遺産を知ることになる。

### ■古代日本の美意識は世の中を見る「視線」

「美しい」と思うことは人によって違う、という前田先生の意見に間違いはないが、「美しい」と「美」と「美意識」を区別する必要がある。

その美意識もまた、文化や時代によって異なる。古代日本においては、『竹取物語』などが証明しているように、美意識は世の中を見る「視線」であり、主要な認知手段だったと言

える。未知の世界と接触した古代ギリシャ人は「ロゴス」といった合理的な概念によってその世界を整理し説明しようとしたのに対して、古代日本人は「美しきこと限りなし」すなわち最大の「美」を通してそれを解釈しようとしたのだ。

日本古代文学における「美」と「美意識」の働きは、その最も大きな特徴の一つであり、アジア人として世界初のノーベル文学賞を受賞したラビンドラナート・タゴールは、日本にしかない、しかし全世界の人々にとって大事であるものとして次のように賞賛している。

「すべての民族は、その民族自身を世界にあらわす義務を持っています。(中略)民族は彼らのなかにある最上のものを提出しなければなりません。(中略)日本は一つの完全な形式をもった文化を生んできたのであり、その美のなかに真理を、真理のなかに美を見抜く視覚を発展させてきました。(中略)日本は正しく明確で、完全な何物かを樹立してきたのであります。それは何であるかは、あなたがたご自身よりも外国人にとって、もっと容易に知ることができるのであります。それは紛れもなく、全人類にとって貴重なものなのです。それは多くの民族のなかで日本だけが単なる適応性の力ではなく、その内面の魂の底から生み出してきたものなのです」(ラビンドラナート・タゴール、「日本の精神」、『迷える小鳥2』、アポロン社、1960)。

#### ■古典は日本人の文化的アイデンティティの源

前回のシンポジウムで、日本人の文化的アイデンティティの問題がほとんど強調されなかったことには驚いた。古典文学は日本人の文化的アイデンティティの源だ、と明確にいうべきだ。

古代日本語、とりわけ「やまと言葉、仮名文字の言葉」は現代日本語の原型であり、その言葉は文学を通して発展していった。そのため、その文学を知ること、現代日本語を知ることにつながる。現代日本語には英語などに比べてマイナス点が目立つが、原点に戻って再考察すれば、大きなプラス点も見えてきて、それが文化的な自信につながる。

#### ■「オリジナル」を読む必要性

古典文学は現代語訳で読んでも良いだろうが、それは到着点ではなく出発点にすぎない。源氏物語のようにとても長い作品の場合やむを得ないが、しかし、読みの過程とは、内容を把握した上、そこからさらに気になったところを、丁寧に読み、注釈を参考にしながらも、自分なりに読んで、解釈していくことだ。

何しろ、どの現代語訳も「完璧」ではない。そのほとんどが男性によって行われたことを考えれば、なおさら現代人が自分の視点から「再解釈する」必要性は明確である。

日本の重要な知的遺産である古典文学を「オリジナル」を通して知っていく過程は、読者の想像力と創造力を刺激する結果にもつながる。

人文科学の分野のみならず、自然科学の分野においても、こうした能力は極めて重要だ。よって、現代語訳だけでなく「オリジナル」を読むべきである。

#### ■漢文もまた、日本の重要な知的遺産

前田先生は、ラテン語を例にして漢文を習う必要がないと言っていたが、それも前提が違う。

西洋では、ラテン語は長い間「教養の言語」であり、「権威ある言語」として使われていた。イタリア語・フランス語・イギリス語などの文学は、その上に、その続きとして、またそれとの対照として成立していったのだ。

日本においても、漢文は「真名」としてのステータスを担う教養の言語であり、「ハレの場」において専用言語だった。しかし、古代日本人が特有の「仮名文字」作成に成功した結果、漢文と和文は共存し、こうした共存は和文の発展のための刺激となった。

一方、漢詩や江戸時代の荻生徂徠などの漢学者の研究に明確にみられるように、日本の「漢文」は古代中国語とは違って、その日本的な解釈により「和語化された古代中国語文」となっている。

つまり、漢文もまた、日本の重要な知的遺産である。その知識は、異なる文化の受容のモデルとして、現代もとても参考になりえる。

#### ■現代の古典教育の問題

現代教育の形式、「受験」という”偽目的”、モチベーションの無さなどには、とても大きな問題がある。それらを再検討して変更しない限り、「古典嫌い」の若者たちは増え続け、やがて古典教育の危機に繋がるだろう。

考えてみれば、受験に利用されるなど、主として「実用的な」役割を押し付けられた古典教育が「本当に実用性があるか」と問い詰められることには、あまり無理はないのかもしれない。